

## 【会長賞①：中学生の部】

### 「弟からのメッセージ」

山形県・尾花沢市立玉野中学校  
3年 西塚 暁羽 さん

「かわいいね！」

これが、初めて会った生まれたばかりの弟に私が発した言葉でした。この後に弟に与えられる試練の日々に思いを致すこともなく。

弟は、700グラム未満の超未熟児で生まれたため、目と耳が未発達で、正常に機能していなかったそうです。そうとも知らない私は初めてできた弟の存在がとても嬉しく、かわいくて仕方ありませんでした。未発達なままの目耳を抱えている弟は、なかなか家族のもとに来ることはできず……、私の誕生日の日に、私へのプレゼントとして、弟との待望の「初対面」ができることになりました。分厚いガラス越しでの対面でしたが、とても嬉しかったのを覚えています。小さな体の小さな鼻には酸素チューブがさし込まれていましたが、私にはやっと会えた喜びが大きく、その光景を不思議だとさえ感じませんでした。

それからは、弟が退院するまでの約1年間会うことができず、私はどんなになつたかな、何をして遊んであげられるかな、などと思いをふくらませて過ごしていました。看護師さんから「歌を聞かせてあげると喜ぶよ」と聞き、ボイスレコーダーで私の歌を録音して持って行って聞かせてもらいました。母の話では、小さな小さな弟も、それを聞くととても喜んでいるということでした。

そんな弟が退院して初めて聞かされたのは、耳が不自由だという現実です。幼い私には理解できず、ここから先訪れる数々の試練など思いもしませんでした。

母は、「いっぱい声をかけて、たくさん話しかけてあげてね」と言いました。だから、私は毎日本を読んであげたり、歌を歌ってあげたりしていましたが、それでも、弟はなかなか音が拾えず、補聴器を着けることになりました。音の伝わり方に慣れなかったのか、弟はいらいらしたり、物を投げたりすることが多くなり、周囲の家族も、伝わらないいらだちとこれからの不安とで、悩む日々が多くなりました。単語帳を作って、何度もオウム返しのように言葉の意味を教え、そのかいもあって、成長と共にものごとの伝達もできるようになってきました。

私達には、こんなふうに大切に育ててきた弟ですが、ひとたび外に出ると、周囲には冷たい視線や態度があったのも、本当に悲しい事実です。幼いのに補聴器を着けていて話し方も変に聞こえたり、うまく意思伝達ができない時の様子に

偏見の目を向けられたりするたびに、私は、哀れさと腹立たしきでいっぱいになりました。心がとても澄んでいて純粋な弟なのに、なぜ、こんなふうな目にさらされなければならないのでしょうか。

両親は、そんな私に、よく言いました。

「琉太はまだ良い方で、世の中にはもっと深刻な障害があって苦勞している人がいる。」

と。——私は、これまで、そんなことを考えたことはありませんでした。弟が障害をもって生まれてくれたからこそ自分を中心にして考えることの情けなさ、狭さを学んだ気がします。

現在、小学校高学年になった弟は、普通に話ができ、私達は口げんかもします。それは幸せなことなのだと、これも弟が気付かせてくれました。

障害がある人生は、不便なことはありますが、不幸ではありません。その人の幸・不幸は他人が決めることではなく、本人の生き方次第だと思います。哀れみや同情ではなく、同じこの世の中を支え合っている一員として考える時、その人にとってできないことに手を貸す、自分も必要とする考えやアイデアをもらうなど、互いに役割を分担して共生することが、これからの時代に求められる生き方なのではないでしょうか。

AIにはできない、心と心で支え合う世の中を、私は創っていきたいと考えます。